

# ピラントロの作中人物ヴィタンジェロについて

山口 清

「一人であって、誰でもなく、十万人でもある」(Uno, nessuno e centomila) という異様な題名を持つピラントロの長篇小説はヴィタンジェロ・モスカルダという人物の自伝的な反省録の形式で書かれた作品である。ピラントロ研究家の一人であるアルミーニオ・ヤネルによれば、それはかつてイタリア語で書かれたことのある最も特異な長篇である。形而上的であると同時に現実的で、作者の鋭い論理が全篇を貫いている。それは決して通俗的な小説とは言えない。芸術としての価値も否定されるかも知れない。しかしその中に表現された作者の思想は不思議な魅力を持っている。それは彼の他の長篇の中では感じられないような魅力、神秘的な思想の魅力である。

この長篇は、同じく人格のテーマを扱った短篇「ステファノ・ジョーリ、一人で二人」(一九〇九年)が出された翌年、即ち一九一〇年頃に書き始められたものであると推測されている。完成され

ピラントロの作中人物ヴィタンジェロについて

たのは一九二四年、発表されたのは一九二五年から一九二六年にかけてである。一九二五年という年は、ピラントロがローマに彼の芸術劇場を創設した年であり、劇作家としての彼の活動がその頂点を極めた年である。彼は既に「作者を探す六人の登場人物」(一九二一年)や「エンリコ四世」(一九二二年)などの大作のほかにも多のすぐれた劇作を発表し、劇作家としての彼の名声は既に世界的になっていた。そういう時期に「一人であって、誰でもなく、十万人でもある」という謎のような長篇が発表された。第一次大戦の前から、大戦の時期を通じ、また劇作の多忙な時期を通じて、約十五年という長い年月がこの長篇のために費されたことを思えば、如何にそれがピラントロの執念の作であったかが容易に想像されるであろう。

この長篇については、それが未だ完成される以前に、既に一部の人々の間には知られていた。一九二二年に「エポカ」誌のためにピ

ピランデルロの作中人物ヴィタンジェロについて

ランデルロと会見を行ったディーエーゴ・マンガネルラに対して作者は次のように語った。

「それは私の劇作への序文となる筈であったが、その要約として終るであろう。それは個人の人格の解体の物語である。それは最も極端な結論、最もかけ離れた結末に到達するであろう。」

この作品は個人の人格、即ち我（われ）の追究である。彼の全作品はこの私の追究ということもできる。「個人の人格の解体」はその追究の結論である。「一人であって、誰でもなく、十万人でもある」という題名はその人格の解体を説明している。

ピランデルロ劇の多くは彼の短篇を發展させたものであるが、それと同じように、この長篇は「ステファノ・ジョーリ、一人で二人」という短篇を發展させたものである。この短篇の中で、主人公ステファノは妻によって彼とは全く異なる人格として認められていることを発見する。その発見がステファノの物語のすべてである。

長篇の中にもそれと同じような発見が描かれているが、それはヴィタンジェロの物語のすべてではなく、その出発点に過ぎない。

長篇は多くの小さな章に分かれていて、それらの章は「私の妻と私の鼻」、「そしてあなたの鼻は?」、「私がいて、あなたがいる」、「私はビビと語る」(ビビというのはヴィタンジェロの妻の愛犬の名)、「雲と風」、「内なる神と外なる神」などの風変わりな題

名を持ち、最後の章は「私は結論しない」となっている。

最初の「私の妻と私の鼻」の章には、ヴィタンジェロが或る日鏡をのぞいている時、彼の鼻が右の方に傾いていることを妻によって指摘されるところが描いてある。「何をなさってるの?」「何もしてないよ。鼻の中を、この鼻の孔の中を見ている。おさえると少し痛いもんだから。」「どちらへ傾いているのか見ているとばかり思っていました。」「傾いている? 私の? 鼻が?」「そうですよ、あなた。自分をよく眺めてごらんさい。右の方に傾いています。」「長篇はヴィタンジェロと妻との間のこのような対話によって始められている。ヴィタンジェロは二十八才になるまで、自分の鼻が、身体の他の部分と同じように、非常に美しくはないにしても、少くとも非常に上品であるとばかり思っていた。続いて彼は自分の眉がアクサン・シルコンフレクスの形であり、耳の付き方が悪くて一方の耳が他方よりも突き出ていることなどを発見する。これらの発見はまことに意外な出来事であって、それ以来、ヴィタンジェロの心には、自分は他人の目には自分がそうだと考えていた通りの者ではなかったのだという思いが固定する。同じことは、身体的なものばかりではなく、精神的なものについても言えるのである。

ピランデルロは好んで「自分が生きるのを見る」(Vedersi Vivere)、或は「自分が生きるのを眺める」(Guardarsi Vivere)

という言葉を用いる。そして好んで作中人物が鏡をのぞく場面を描いている。非常に空想的な「息のひと吹き」(Soffio)という短篇の中には、主人公が鏡にうつる自分の姿に向かって息を吹きかけると、その姿が鏡の中からたちまち消え失せる場面がある。「エンリコ四世」の中では、エンリコはマチルデに対して次のように語る。「奥さん、あなたがあなたの髪を染めるのは、他人を欺くためでもなく、あなた自身を欺くためでもなくて、ただ鏡の前であなた自身の像をちよっぴりだますためです。私はたわむれにそれをします。が、あなたは大真面目でしています。」

ピランデルロに於いて、鏡は必ずしも鏡そのものを意味するのではない。自分自身の姿をうつすものは、すべて鏡なのである。そういう鏡の前に立つことは危機を意味する。ピランデルロ劇は危機の表現である。彼の劇が「鏡の劇」(Teatro dello Specchio)と呼ばれるのはそのためである。

さてヴィタンジェロは、あの意外な発見以来、ひとりでいることを、一時間だけでも、ひとりであることを望むようになる。

「まことにそれは願望というよりも寧ろ必要であった。私の妻が目の前にいること、或は近くにいることが、ひどく腹立たしくさせる以上、それは緊急のはげしい必要であった。」

ヴィタンジェロの妻は彼をジェンジェという愛称で呼んだ。妻の

ピランデルロの作中人物ヴィタンジェロについて

目に映るヴィタンジェロのイメージはその愛称の中に集約されている。

「ジェンジェ、昨日ミケリーナが言ったことを聞きましたか？」

クアントルトツォが至急あなたに話すことがあるそうです。」

「ジェンジェ、柱時計がとまりました。」

「ジェンジェ、犬を外に連れて出ないのですか？」

「ジェンジェ、アンナ・ローザは病気かも知れないとは思いませんか？」

「ジェンジェ、フィルボさんが来ました。またあとで来ると言っていました。そとでは会えないのですか？何とうるさいんです。う。」

またヴィタンジェロは妻が次のように歌うのを聞く。

「もしも私にノーと言うなら、

愛する人よ、あした私は来ないでしょう、

あした私は来ないでしょう……

あした私は来ないでしょう……」

ヴィタンジェロは、ますますひとりでいたい気持になる。

「私は全く例のないような新しい方法でひとりであることを望んだ。あなたが考えるものとは全く反対である。即ち我(われ)なしに、そして他の者と共にいることである。これは狂気の最初の一歩

しと思われるだろうか。それはあなたがよく熟考しないからである。私の中には狂気があるかも知れない。それは否定しない。しかし、ひとりである唯一の方法は私にあなたが告げるこれであること信じて貰いたい。」

ここで我なしにというのは、ヴィタンジェロが既に知っていた、或は知っていると言っていた、我と共にではなく、という意味であり他の者と共にというのは、彼が自分の周囲から払いのけることはできないと感じ、彼自身が彼とは不可分の他の者であると感じていた、その他の者と共に、という意味である。この他の者とは、無意識の我、或は深い我であると言いうこともできる。

「私が鏡の前に立っていた時、私の中に停止のようなものが起こった。すべての自発性が終り、私のすべての身振りが私にとっては虚偽の作り直されたものに見えた。私は自分が生きるのを見ることができなかった。」

その一方に於いてヴィタンジェロは大自然を眺めることに幸福と慰めとを見出すのである。それは大自然が、何か私たちのもの、私たちの深い我として感じられるからである。大自然と共にいることは、夢みることであり、私たちの最も深い本質の中で殆んど無意識に生きることである。そのようなヴィタンジェロの中には叙情的な神秘的なピランデルロが感じられる。「雲と風と」いう章には次の

ような一節がある。

「ああ、石のように、植物のように、存在の意識を最早持たない。自分自身の名前さえも最早記憶しない。両手を首のうしろに組んだまま、草の上に横たわり、陽の光をはらんで走る、白い、まぶしい雲を青空に眺める、上空に、森の栗の木の間に、海の音のように騒がしい風の音を聞く。雲と風と。あなたは何と言ったのか。ああ。雲か。風か。限らない青い虚空を光って走るものが雲であることを感じて知ることが、あなたにとってはすべてであるとは思われないのか。雲はそれ自身の存在を知っているだろうか。木と風は雲を知らない。それらはそれら自身をも知らない。それらはひとりである。」

このような叙情的なピランデルロは、彼の短篇の中でもしばしば見られる。*Canina l'Epistola* という短篇の中では、修道会に入っていた青年が、信仰を失って自分の村に帰り、村人たちの嘲笑の的になる。しかし彼はすべての世間的な事柄の愚かさを知っているのだから、村人たちから加えられる侮辱を少しも気にかけない。彼の敏感な心は汎神論的となって、大自然のすべての示顕、特に植物や一日だけしか咲かないような小さな花に向けられる。植物や昆虫がかく、いやしいものであればそれだけ、それらは益々彼の同情を呼び、彼を涙にまで誘うのである。時としてそれは蟻であり、はえで

あり、また或る時は一葉の草でもある。

さてヴィタンジェロは亡くなった銀行家の父から、かなりの財産を受けついでいるが、金銭上の利益のことには少しも注意を払わないで、その財産の管理を亡父の二人の友人にまかせている。二人の友人とは、先にヴィタンジェロの妻の言葉の中でその名をあげたクアントルツォとフィルボのことである。彼等は委託された任務をあまりにも忠実に能率的に遂行するので、世間では、ヴィタンジェロは極悪非道の高利貸という評判を立てられる。彼はそれを知って、彼の内なる神が傷つけられたことを感じて怒る。

彼は自分が世間の人びとにとっては高利貸であり、妻にとってはジェンジェであり、自分を見る人によって、それぞれに異なる人格であって、自分自身とは全く異なる人格であることを発見するのである。

そこでヴィタンジェロは、他人がこしらえた彼のイメージ、他人が彼に与えた現実性を破壊しようと決心する。或る日、彼は二人の借家人を雨の中に家から追い出す。彼等はヴィタンジェロの亡父が無料でその貸家に住まわせていたのである。ヴィタンジェロは、彼等を家から追い出した直後に、同じ家を贈与する証書を彼等に読ませるのであるが、恩恵を受けた二人は、ヴィタンジェロは気が狂ったのだと思いつむ。

ピランデルロの作中人物ヴィタンジェロについて

「高利貸モスタルダには確かに発狂する可能性はあった。しかし彼は、彼の性質に反する、筋の通らない証書をもって、一撃のもとに彼自身を破壊することはできなかった。高利貸モスタルダは嘲弄すべき亡霊ではなかった。ふさわしい敬意を払って遇すべき、身のたけ一メートル六十八センチの、お父さんのように赤い髪を持つ紳士であった。」

同じことはジェンジェにも起きる。ヴィタンジェロは妻が彼に与えた形の中に、彼自身を認めないことは確かにできるのであるが、彼がその形を荒々しく破壊しようとする時に、妻は最早彼の中にジェンジェを認めることができなくなって家からとび出し、父のところへ帰ってしまうのである。彼は妻の父に会って話をした後、次のように書くのである。

「彼は私が彼の婿（彼が私の中に見ていたあのジェンジェ）を、それが今まで置かれていた状態から、即ちあの安楽な人形のような安定から取り除くことを認めることはできなかった。その安定は彼が一方の側から、彼の娘が他方の側から、そして銀行の仲間たちが彼等の側からジェンジェに与えていたものであった。」

そこでヴィタンジェロは、彼自身のために一つの現実性を与え、最早高利貸でもなく、ジェンジェでもない「一人」になろうと望むのであるが、さてどうしたらよいのか分からないのである。彼は宙

につるされたような状態にいて、苦悩と恐怖に満たされる。

「私は他のすべての人びとの眼が私の背に注がれているのを見て来た。それでも、私のこの新たに生まれた意志の中で、私をどのように見たかを知ることができなかった。」

その理由は次のように述べてある。

「私は他人の眼に於いて、私の現実性とすべての事物の現実性を永遠に失った。……私が自分に触れるや否や、私は自分から遠ざかる。なぜなら私のその接触の下に、私は、他人が私に与えていて私が知らない、そして知ることのできない現実性を想像するからである。」

ヴィタンジェロに残された最後の一つの試みは、彼自身を、他人が彼に与える現実性と何等かの方法で等しくさせることである。彼はその試みを妻の友達であるアンナ・ローザに対して行う。彼女は父の形見の拳銃を常に所持していたが、あやまってその拳銃で怪我をして寝ていた。ヴィタンジェロは彼女を訪れて自分の苦しみを打ち明け、彼女にそう見えたかも知れないような、そして彼自身にとっては誰でもないような一人になるために、彼の中にあるすべての生命を彼女に捧げたいと望んでいることを彼女に感じさせるように語った。アンナ・ローザはそれを聞いて感動し、彼を自分の方へ引き寄せるが、すぐそのあとでは枕の下から拳銃を取って彼に向か

って発砲する。一人の人格になろうとするヴィタンジェロの試みはこのような悲劇的な失敗に終るのである。彼はその場面を次のように述べている。

「私は彼女が寝台から私の両腕をつかんだことを知っています。彼女が私を彼女の方へ引き寄せたことを知っています。その直後に私は、彼女が枕の下に持っていた拳銃で胸を打たれました。そして目がくらんで寝台からころげ落ちました。」

さてアンナ・ローザが法によって裁かれる段になると、ヴィタンジェロは自分を狂人のように見せかけることによって彼女の赦免を容易にしようと計る。次に彼の金の問題が論じられる段になると、彼は教会に訴えて金の回復を計る。ヴィタンジェロは、もしも教会が彼の金の回復を助けてくれるならば、銀行の清算から生じる一切の金を慈善事業のために使用することを約束する。勿論、教会は法廷を説得して、ヴィタンジェロが正気であって、その行為に対しては責任があることを宣告させる。その結果、ヴィタンジェロは彼の銀行の清算から生じた金をもって貧民収容所を建て、自らその最初の収容者となるのである。

「アンナ・ローザは釈放される筈であった。しかし私は彼女の釈放は、私が証言のために法廷に呼び出され、貧民収容所の帽子と木靴と空色の上っ張りを着用して現われた時に、全法廷にみなぎった

浮き浮きした気分のせいでもあったと信じている。

ヴィタンジェロは、このようにして、家と妻と友人と地位と財産のすべてを失って、貧民收容所の收容者となり、至福の境地に到達する。彼の改心はアッシジの聖者フランチェスコの改心を思い出させる。両者の違いは、フランチェスコが人間に対する愛のために改心したのに反して、ヴィタンジェロは人間に対する恨みのために改心した点にある。

「結論しない」という題名を持つ結びの章は、ヴィタンジェロが到達した至福の境地を説明する。

「私は生きていて、結論しない。生命は結論しない。生命は名前を知らない。この樹木、雲。明日は書物、または風。私が読む書物、私が吸いこむ風。全く外にいて、放浪者である。」

最早ヴィタンジェロは他人が彼に与える人格の中に固定されることはない。彼は生命の自然的な流れに身をまかせる。生命の流れはとどまることを知らない。彼もとどまることはない。自発的で拘束されることがない。彼は自由となる。

「收容所は平原に、美しい場所に立っている。私は毎朝、夜明けの外に出る。今や私は精神を夜明けの新鮮さに保ちたいからである。……」

「瞬間毎に再生する。思想が私の中で再び働き始め、私の中に空

ピランデルロの作中人物ヴィタンジェロについて

(むな)しい構造物のうつろを再び作るのを阻止する。

町は遠い。時々、夕べの静けさの中に、鐘の音が私までとどく。しかし私はその鐘を最早私の中では聞かず、そとで、それ自身のために鳴るのを聞く。鐘は、暑い陽の光にみちた美しい青空で、つばめの鳴声の間か、或は曇天の風の中で、重いのにこんなにも高く鐘楼の上で、あのうつろな穴の中で喜びにふるえているのであろう。死を思うて、祈る。まだこの必要を持つ人がいる。鐘はそれを告げている。私は最早この必要を持たない。なぜなら、私は刻々に死に新たに、そして記憶なしに再生するからである。私は生きていて完全である、最早私の中ではなく、そとのすべての物の中で。」

ピランデルロが東洋思想の影響を直接に受けたかどうかは確かでない。しかし彼の思想の中には多分に東洋的なものあることを見のがすことはできない。

#### 参考文献

- Arminio Janner, *Luigi Pirandello*, Firenze, 1948.  
Cesare Guasco, *Ragione e mito nell'arte di Luigi Pirandello*, Roma, 1954.  
Gaspere Giudice, *Pirandello*, Torino, 1963.  
Domenico Vittorini, *The modern Italian Novel*, Philadelphia, 1930.